

胤按今稱外曾祖父母

〔伊呂波字類抄於人倫〕親オヤ

〔日本書紀應神〕二十二年三月丁酉登高臺而遠望時妃兄媛侍之望西以大歎○中爰天皇愛兄媛篤温清之情則謂之曰爾不視二親既經多年還欲定省於理灼然則聽之略

〔萬葉集三雜歌〕山部宿禰赤人歌六首

美沙居石轉爾生名乘藻乃名者告志ハシナコトヲ余親者知友オノオヤノトヲ

〔枕草子九〕むねつぶる、物

おやなどの心ちあしうして、れいならぬけしきなる、まして世の中などさわがしき比、よろづの事おぼえず、

〔松屋筆記九十〕親代オヤノト

源平盛衰記廿卷丁ウ六石橋合戰條に家安親代ト成テ夜ハ胸ニカ、ヘ奉テ通夜勞ハリ、晝ハ肩ニノセ終日ニ奉育云々、按に母代といふも似たる事なるべし、こは佐奈田與一を郎等文三家安が、はごくみそだてしよしをいへる所なり、

〔貞丈雜記十五〕父の事を昔の人は、おやじや人、又おやじやものと云ひ、母の事を母じや人といひ、兄の事を兄じや人など、いひしなり、今の世の人、父の事をおやじと云ふは、おやじや人と云ふ事を略して、おやじと云ふなり、

〔倭訓栞前編〕四十五、おや、日本紀、續紀、宣命などに見ゆ、祖字をよむは遠祖トホソヤまでを通はしいふ、又

親字をよめり、老の義也、源氏にも、おやはじめのおやなどいへるは祖の義也、古事記に、母の事も祖とも云り、母をおやとよみしは、萬葉集に見えたり、阿爺の字、禪錄に見えたり、伊勢物語眞名本に、母字おやとよめれど、必は、とよむべし、されど萬葉集には、母を多くおやとよめり、我國